題にされる気配がないためだった．約20名の研究者がそれぞれの立場から見解を述べているが，これらはわずか二ケ月の間に執筆編集刊行されたもので，彼らに代表される有識者の危機感の深刻さを象徴している．生物学者が単純に自然保護を唱えているだけでは足らず，社会的政治的発言をせねばならぬ時代となったこと，そしてそういう発言をするに足りる情報蓄積がなされたことを示している．表題だけを要約して並べると次のとおり．気候変動と生物多様性の未来（座談会），温暖化と生物多様性，生物多様性の危機，CO_2排出の長期見通し，生態系と炭素循環，温暖化に伴う気候変化予測，縄文海進，高山植物群落はどのように変化するか，危機的状況にある水草の世界，海の生物たちはどうなる，魚類にとっての温暖化，ウミガメへの影響，昆虫へのインパクト，高層湿原の高山蛾，森林害虫，鳥に何が起きるか，ナキウサギは温暖化に耐えられるか，人獣共通感染症の恐怖（対談），感染症の増加と温暖化，生物多様性を視点に地球温暖化を考える．（金井弘夫）

□山口裕文（編著）：**雑草の自然史** 234 pp. 1997. 北海道大学図書刊行会．¥3,000

雑草や帰化植物のような，どこにでも生え駆除の厄介な植物についての，専門研究者16名による研究成果の紹介である．雑草フロラの成立，適応力を解明する，生活史戦略をさぐるの3部より成り，副題にあるように‘たくましさの生態学’を解説する．とりあげられた植物はタカサブロウ，タイヌビエ，ハマスゲ，ナズナ，チガヤ，ヤエムグラ，ヨメナ，オオバコ，セイヨウタンポポ，セイタカアワダチソウ，トピックとしては雑草の起源，薬剤耐性，生育型，発芽生理，散布法，他感作用，遺伝性とさまざまである．一般むきにはちょっとむづかしいが，一応の下地のある読者には，とくに生理的な面からの説明に得るところが多いだろう．巻末に各種文献から抽出した，わが国の帰化植物105科1273種類の一覧表がある．（金井弘夫）

□ジョンストン V. R., 西口親雄（訳）：**セコイアの森** 295 pp. 八坂書房．¥2,800.

原書名は California Forests and Woodlands である．目次を見ると，針葉樹の見分け方とか下部アルプス帯の森林とか，アカモミ林とロッジポールマツ林とか生態系の名前が並んでいるが，植物生態学の本ではない．それらの生態系に生活する生き物すべてにわたる，自然観察の書である．だから植物はもとより，哺乳動物，鳥，昆虫，きのことなんでも登場し，お互いの生活のかかわり合いが述べられている．そしてかれらの生活を守るための法律や規制の方法まで記されている．カリフルニアトチノキの生活から種子の毒性におよび，インデアンによって魚毒に利用されたのち食用となること，この木の下には生育する植物は少ないが，カリフォルニアツタウルシはよく見られること．ツタウルシのかぶれの元はウルシオールだが，シカ，ウシ，ウマは食餌とすること，果実は多くの鳥の食料となるが，キツツキ類もその中に入ること．キキツツキの主な食料は昆虫で，どんな姿勢で採食するか…という具合に，あとからあとから話がひろがってゆく．ともすると混沌としてしまうストーリーが，要領よくまとめられている．口絵のカラー写真以外は，サイモン C. J. による線画で，親しみ易い印象を与える．原著者はカレッジの教師を永く勤めた人で，森林昆虫専攻の訳者は著者の観察眼の正確さにひかれたという．日本でもこういう広い実地の経験と知識のある人による，案内書がほしいものだ．（金井弘夫）

□小山鐵夫：**植物園の話** 205 pp. 1997. アボック社．¥1,286.

植物園というと観光行楽施設というのがわが国の一般的な印象で，マスコミに登場するのはきれいな，珍しい植物ばかり，その真の役割はよく理解されていない．単なる教員ローテーションのポストとしてしか利用していないような人員配置の植物園もみられる．30年近くをニューヨーク植物園で研究・教育・運営にかかわり，世界各地の植物園になじみのある著者が，自然保護，遺伝子資源，植物情報などの今日的な植物園の役割について語ったものである．まず，総合植物園，特殊植物園，植物公園の区別から始まり，ニューヨーク植物園を例として，実際の運営のとくに裏方の仕事が紹介される．次に植物園の本